



NISSAY
ASSET MANAGEMENT

ニッセイ・インデックスバランスファンド (8資産均等型)

<購入・換金手数料なし>

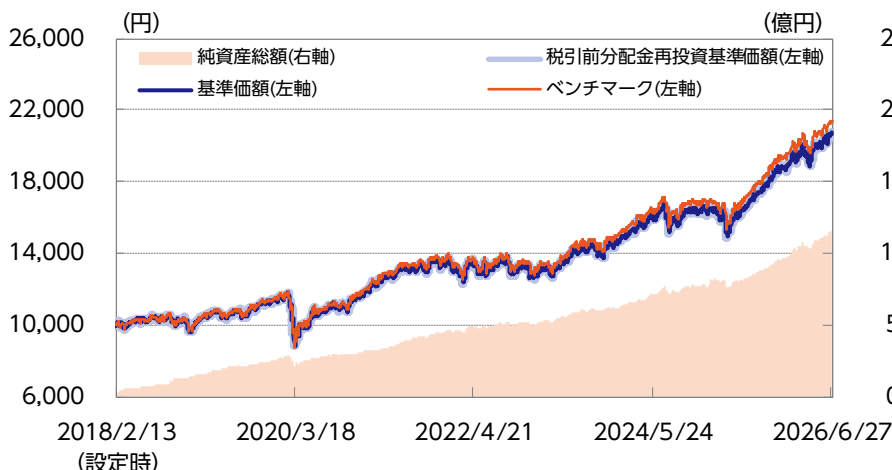
追加型投信／内外／資産複合／インデックス型

マンスリーレポート

2026年6月末現在

運用実績

基準価額・純資産の推移



基準価額の騰落率 (税引前分配金再投資)

	1ヵ月	3ヵ月	6ヵ月	1年	3年	設定来
ファンド	1.5%	9.5%	9.0%	24.5%	45.2%	107.0%
ベンチマーク	1.6%	9.6%	9.2%	25.0%	46.9%	114.0%

基準価額および純資産総額

基準価額	20,695円
前月末比	305円
純資産総額	11億円
組入マザー純資産総額 合計 (参考)	25,363億円

分配の推移 (1万口当り、税引前)

第2期	2019年11月	0円
第3期	2020年11月	0円
第4期	2021年11月	0円
第5期	2022年11月	0円
第6期	2023年11月	0円
第7期	2024年11月	0円
第8期	2025年11月	0円
直近1年間累計		0円
設定来累計額		0円

※上記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。

※基準価額は信託報酬控除後のものです。税引前分配金再投資基準価額は分配金 (税引前) を再投資したものと計算しております。なお、信託報酬率は「手続・手数料等」の「ファンドの費用」をご覧ください。

※運用状況によっては、分配金額が変わる場合、あるいは分配金が支払われない場合があります。分配金は信託財産から支払いますので、基準価額が下がる要因となります。収益分配金には普通分配金に対して所得税および地方税がかかります (個人受益者の場合)。

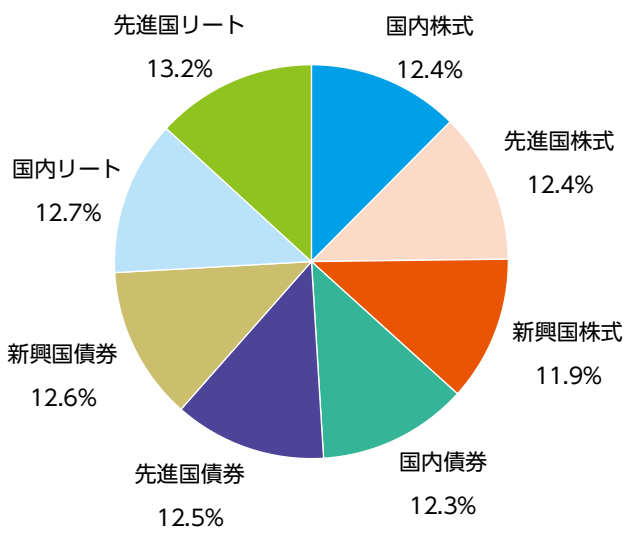
※ファンド騰落率は分配金 (税引前) を再投資したものと計算しており、実際の投資家利回りとは異なります。

※基準価額の前月末比は、決算日到来月に分配金支払実績がある場合、分配金込みで算出しています。

※ベンチマークは、TOPIX (東証株価指数) (配当込み)、MSCIコクサイ・インデックス (配当込み、円換算ベース)、MSCIエマージング・マーケット・インデックス (配当込み、円換算ベース)、NOMURA-BPI総合、FTSE世界国債インデックス (除く日本、円換算ベース)、JPモルガン・エマージング・マーケット・ボンド・インデックス・プラス (除くB格以下) (円換算ベース)、東証REIT指数 (配当込み)、S&P先進国REITインデックス (除く日本、配当込み、円換算ベース) を8分の1ずつ組合せ合成したもので、設定日前営業日を起点として指数化しています。

※組入マザー純資産総額合計は、ニッセイ国内株式インデックス マザーファンド、ニッセイ外国株式インデックス マザーファンド、ニッセイ新興国株式インデックス マザーファンド、ニッセイ国内債券パッシブ マザーファンド、ニッセイ外国債券インデックス マザーファンド、ニッセイ新興国債券インデックス マザーファンド、ニッセイJ-REITインデックス マザーファンド、ニッセイ先進国リートインデックス マザーファンドの純資産総額の合計値です。

資産別組入比率



※対組入マザーファンド評価額比

運用体制

原則作成基準日時点で入手しうる情報に基づきます。

2026年3月31日時点	
運用責任者	深山 大介・藤井智朗
経験年数	18・24年
運用担当部	ファイナンシャルテクノロジー運用部

マザーファンドの状況

国内株式（ニッセイ国内株式インデックス マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	1.0%	1.1%
3ヵ月	14.4%	14.4%
6ヵ月	18.5%	18.6%
1年	43.2%	43.3%
3年	87.2%	87.3%

※左記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
※ベンチマークはTOPIX（東証株価指数）（配当込み）としています。

組入上位10業種

	業種	比率
1	電気機器	23.1%
2	銀行業	11.5%
3	卸売業	6.9%
4	機械	6.2%
5	情報・通信業	6.1%
6	輸送用機器	4.8%
7	化学	4.8%
8	小売業	3.9%
9	サービス業	3.4%
10	保険業	3.3%

※対組入株式評価額比

組入上位10銘柄

	銘柄	比率
1	三菱UFJフィナンシャル・グループ	3.6%
2	東京エレクトロン	2.9%
3	トヨタ自動車	2.6%
4	三井住友フィナンシャルグループ	2.4%
5	ソフトバンクグループ	2.1%
6	日立製作所	2.0%
7	ソニーグループ	2.0%
8	村田製作所	1.9%
9	みずほフィナンシャルグループ	1.9%
10	アドバンテスト	1.7%

※対組入株式評価額比

当月の市況動向

当月の国内株式市場は上昇しました。

上旬は、日銀の追加利上げ観測の高まりや中東情勢の先行き不透明感が相場の重荷となり、軟調に推移しましたが、中旬に入ると、米国とイランが戦闘終結に向けた覚書に合意したことなどを好感し、上昇しました。下旬は、政府により官民投資計画の詳細が発表され、戦略17分野への期待が高まる一方、海外において人工知能（AI）向けデータセンターへの巨額投資の収益化に対する懸念が再燃したことで、上値の重い展開となったものの、月間では上昇しました。日経平均株価の月末終値は70,062.32円（前月末比+3,732.82円）となりました。

東証株価指数（TOPIX）の月末終値は3,994.76ポイント（前月末比+37.59ポイント）、JPX日経インデックス400の月末終値は36,302.01ポイント（前月末比+294.02ポイント）となりました。

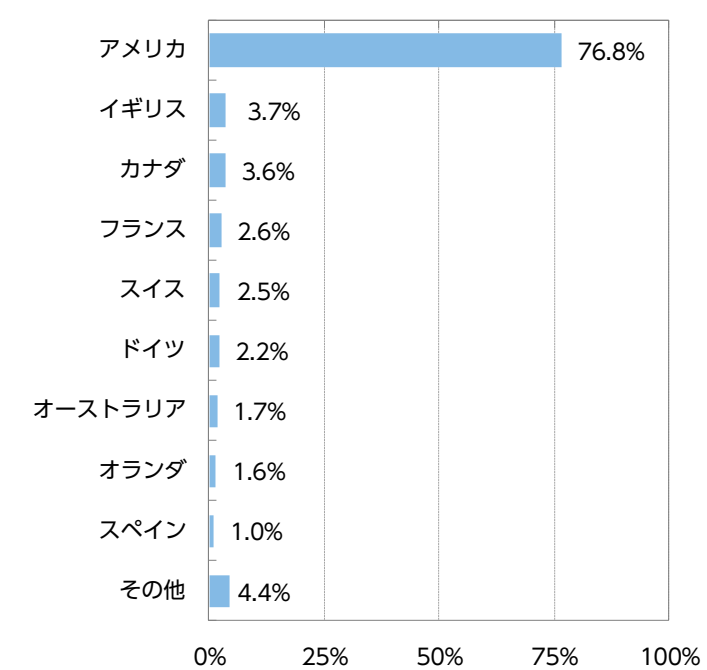
先進国株式（ニッセイ外国株式インデックス マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	0.7%	0.6%
3ヵ月	17.5%	17.5%
6ヵ月	11.9%	11.8%
1年	35.3%	35.1%
3年	92.0%	91.0%

※上記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
※ベンチマークはMSCIコクサイ・インデックス（配当込み、円換算ベース）としています。

国・地域別組入比率



※国・地域はニッセイアセットマネジメントの分類によるものです。以下同じです。
※対組入株式等評価額比

組入上位10銘柄（銘柄数：1116）

	銘柄	業種	比率
1	エヌビディア	情報技術	5.4%
2	アップル	情報技術	5.0%
3	マイクロソフト	情報技術	3.1%
4	アマゾン・ドット・コム	一般消費財・サービス	2.8%
5	アルファベット（A）	コミュニケーション・サービス	2.5%
6	ブロードコム	情報技術	2.0%
7	アルファベット（C）	コミュニケーション・サービス	2.0%
8	マイクロン・テクノロジー	情報技術	1.5%
9	メタ・プラットフォームズ	コミュニケーション・サービス	1.5%
10	テスラ	一般消費財・サービス	1.4%

※業種はGICS分類（セクター）によるものです。なお、GICSに関する知的財産所有権はS&PおよびMSCI Inc.に帰属します。以下同じです。
※対組入株式等評価額比

当月の市況動向

当月の世界株式市場は、イーロン・マスク氏が率いる米宇宙会社スペースXによる過去最大規模の新規株式公開（IPO）、AI・データセンター関連株への高値警戒感やAIモデル開発企業の資金調達への懸念、米国とイランの和平交渉進展による原油価格の下落、米国の利上げ見通しの高まりなど多くの材料が錯綜し、値動きが荒くまちまちの動きとなりました。

上旬は、米スペースXによる過去最大規模のIPOを控えて上値が重く、米半導体大手の業績見通しの下振れから半導体関連株が売られたことや、堅調な5月の米雇用統計を受けて米利上げ観測が高まったことなどが重荷となり、下落する展開となりました。

中旬は、米スペースXによる過去最大規模のIPOが堅調な値動きで波乱なく通過して投資家心理を支えたことや、米国・イランが停戦に関する覚書に署名したことにより原油価格が下落し、インフレ懸念が後退したことを受け、反発する動きとなりました。

下旬は、米大手半導体メモリーメーカーが巨額の利益を計上したことが明らかになった一方、メモリー価格の急騰が周辺分野にもたらす影響への懸念や、AIモデル開発企業の人材獲得競争激化、さらには資金調達延期の報道などを背景に、AI・データセンター関連株への高値警戒感と資金調達への懸念が高まりました。こうした要因が相場の重荷となり、特に韓国株式市場では大幅な乱高下が見られました。一方で、ヘルスケアや生活必需品など出遅れていたディフェンシブセクターが物色されるセクターローテーション（景気の局面ごとに有望な業種別銘柄群に投資対象を切り替えていく戦略）の動きがみられ、値動きの荒い相場のまま月末を迎えました。

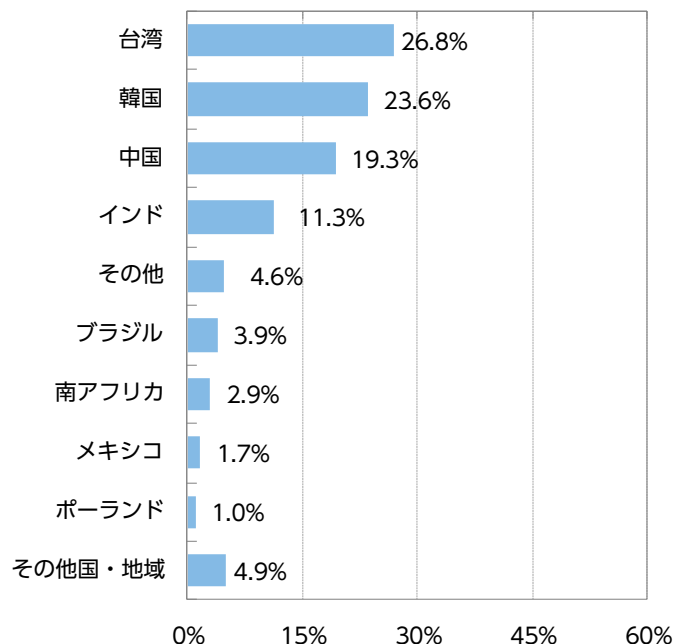
新興国株式（ニッセイ新興国株式インデックス マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	0.9%	1.0%
3ヵ月	23.6%	23.4%
6ヵ月	27.4%	27.3%
1年	58.8%	58.7%
3年	106.1%	107.0%

※上記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
 ※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
 ※ベンチマークはMSCIエマージング・マーケット・インデックス（配当込み、円換算ベース）としています。

国・地域別組入比率



※「その他」にはETFを含みます。
 ※対組入株式等評価額比

組入上位10銘柄

（銘柄数：980）

	銘柄	業種	比率
1	台湾セミコンダクター（TSMC）	情報技術	15.0%
2	サムスン電子	情報技術	7.9%
3	SKハイニックス	情報技術	7.6%
4	騰訊控股［テンセント・ホールディングス］	コミュニケーション・サービス	2.7%
5	iシェアーズMSCIサウジアラビアETF	その他	2.4%
6	アリババ・グループ・ホールディング	一般消費財・サービス	1.6%
7	聯発科技［メディアテック］	情報技術	1.4%
8	iシェアーズMSCI UAEキャプットETF	その他	1.2%
9	台達電子［デルタ・エレクトロニクス］	情報技術	1.0%
10	サムスン電子（優先株）	情報技術	0.9%

※業種の「その他」にはETFを含みます。
 ※対組入株式等評価額比

当月の市況動向

当月の世界株式市場は、イーロン・マスク氏が率いる米宇宙会社スペースXによる過去最大規模のIPO、AI・データセンター関連株への高値警戒感やAIモデル開発企業の資金調達への懸念、米国とイランの和平交渉進展による原油価格の下落、米国の利上げ見通しの高まりなど多くの材料が錯綜し、値動きが荒くまちまちの動きとなりました。

上旬は、米スペースXによる過去最大規模のIPOを控えて上値が重く、米半導体大手の業績見通しの下振れから半導体関連株が売られたことや、堅調な5月の米雇用統計を受けて米利上げ観測が高まったことなどが重荷となり、下落する展開となりました。

中旬は、米スペースXによる過去最大規模のIPOが堅調な値動きで波乱なく通過して投資家心理を支えたことや、米国・イランが停戦に関する覚書に署名したことにより原油価格が下落し、インフレ懸念が後退したことを受け、反発する動きとなりました。

下旬は、米大手半導体メモリーメーカーが巨額の利益を計上したことが明らかになった一方、メモリー価格の急騰が周辺分野にもたらす影響への懸念や、AIモデル開発企業の人材獲得競争激化、さらには資金調達延期の報道などを背景に、AI・データセンター関連株への高値警戒感と資金調達への懸念が高まりました。こうした要因が相場の重荷となり、特に韓国株式市場では大幅な乱高下が見られました。一方で、ヘルスケアや生活必需品など出遅れていたディフェンシブセクターが物色されるセクターローテーションの動きがみられ、値動きの荒い相場のまま月末を迎えました。

月間では新興国の株式は下落しました。国・地域別では、インドや台湾が上昇した一方、中国や南アフリカが下落しました。セクター別では、金融や情報技術が上昇した一方、一般消費財・サービスや素材が下落しました。

為替は、米国の利上げ見通しの高まりや、政府・日銀による為替介入への警戒感の低下とみられる動きを受けて、米ドルに対して円安となりました。

国内債券（ニッセイ国内債券パッシブ マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	-0.0%	0.0%
3ヵ月	-1.2%	-1.2%
6ヵ月	-2.8%	-2.8%
1年	-6.3%	-6.3%
3年	-13.1%	-13.2%

※上記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
※ベンチマークはNOMURA-BPI 総合としています。

ポートフォリオ情報

平均格付	※1	AAA
平均修正デュレーション	※2	7.76年
平均最終利回り	※3	2.38%
平均クーポン	※4	1.14%
平均直利	※5	1.29%
銘柄数		411

※1 格付は、R&I、JCR、ムーディーズ、S&Pのうち、上位の格付を採用しております。以下同じです。
また平均格付とは、マザーファンドが組み入れている債券にかかる格付を加重平均したものであり、当ファンドにかかる格付ではありません。
※2「デュレーション」＝債券投資におけるリスク度合いを表す指標の一つで、金利変動に対する債券価格の反応の大きさ（リスクの大きさ）を表し、デュレーションが長いほど債券価格の反応は大きくなります。
※3「最終利回り」＝満期までの保有を前提とすると、債券の購入日から償還日までに入ってくる受取利息や償還差損益（額面と購入価額の差）等の合計額が投資元本に対して1年当たりどれくらいになるかを表す指標です。
※4「クーポン」＝額面金額に対する単年の利息の割合を表します。
※5「平均直利」＝平均クーポン÷平均時価単価
（※2～※5の注釈については、以下同じです。）

組入上位10銘柄

	銘柄	債券種別	償還日	クーポン	格付	比率
1	第483回 利付国債(2年)	国債	2028/04/01	1.400%	AAA	0.9%
2	第484回 利付国債(2年)	国債	2028/05/01	1.400%	AAA	0.9%
3	第350回 利付国債(10年)	国債	2028/03/20	0.100%	AAA	0.8%
4	第183回 利付国債(5年)	国債	2030/12/20	1.600%	AAA	0.8%
5	第480回 利付国債(2年)	国債	2028/01/01	1.100%	AAA	0.8%
6	第359回 利付国債(10年)	国債	2030/06/20	0.100%	AAA	0.7%
7	第353回 利付国債(10年)	国債	2028/12/20	0.100%	AAA	0.7%
8	第376回 利付国債(10年)	国債	2034/09/20	0.900%	AAA	0.7%
9	第374回 利付国債(10年)	国債	2034/03/20	0.800%	AAA	0.7%
10	第375回 利付国債(10年)	国債	2034/06/20	1.100%	AAA	0.7%

※対組入債券評価額比

当月の市況動向

前月末の2.67%近辺からスタートした国内長期金利は、月初の10年債の入札結果が堅調であったことから大幅に低下しました。その後、植田総裁の講演での発言が金融引き締めに向き姿勢であったことや、中東情勢の緊迫化を受けて原油価格が上昇したことから、国内長期金利は上昇に転じました。中旬は、日銀の金融政策決定会合において政策金利の1.0%程度への引き上げ決定により、一時的に金利が上昇する局面もあったものの、米国・イラン間で戦闘終結に向けた覚書が締結されたことを受けて原油価格が下落したことから、国内長期金利は再び低下しました。月末にかけては、株価の上昇を受けた資産配分調整（リバランス）目的の債券買いにより、一時的に金利が低下する局面もあったものの、円安を背景としたインフレに対して日銀の政策運営が後手に回る「ビハインド・ザ・カーブ」への懸念や、高市政権が掲げる成長戦略に対する財政拡張懸念から、国内長期金利は上昇しました。この結果、国内長期金利は前月末比で約0.02%上昇し、2.68%近辺で月末を迎えました。

先進国債券（ニッセイ外国債券インデックス マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	1.6%	1.6%
3ヵ月	3.1%	3.1%
6ヵ月	3.9%	3.9%
1年	14.6%	14.7%
3年	26.4%	26.6%

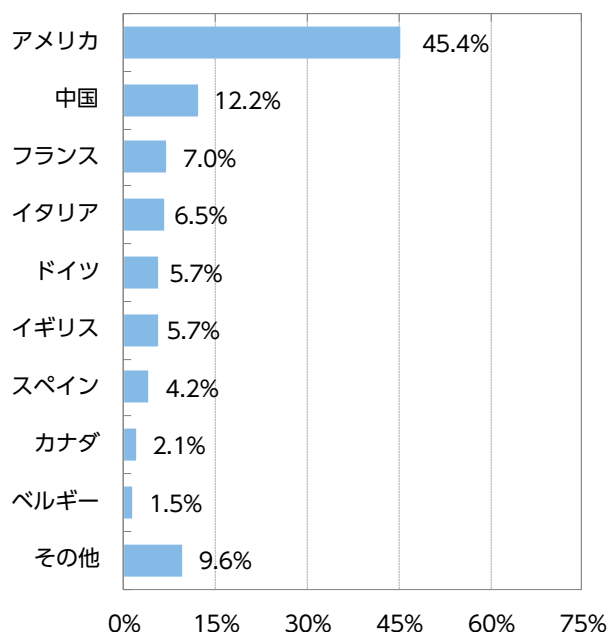
※上記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
 ※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
 ※ベンチマークはF T S E世界国債インデックス（除く日本、円換算ベース）としています。

ポートフォリオ情報

平均格付	※1	A A
平均修正デュレーション	※2	6.19年
平均最終利回り	※3	3.62%
平均クーポン	※4	2.68%
平均直利	※5	2.80%
銘柄数		970

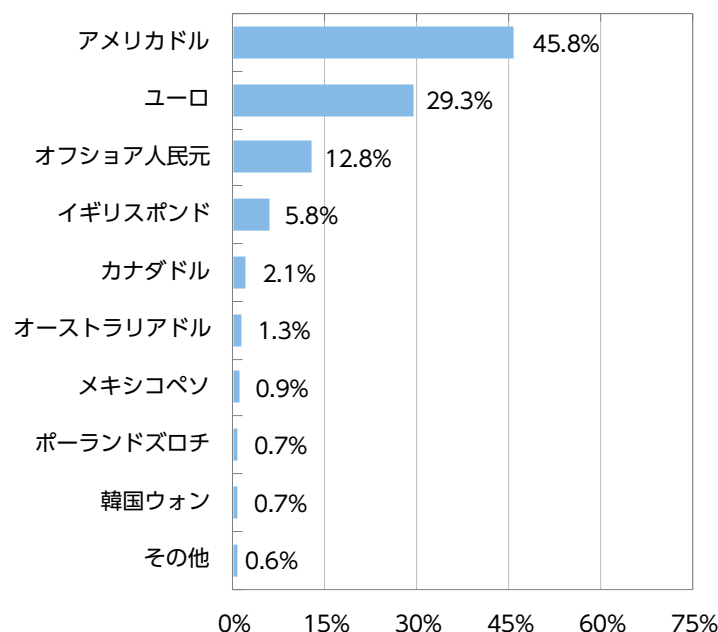
※1 格付は、ムーディーズ、S & Pのうち、上位の格付を採用しております。
 また平均格付とは、マザーファンドが組み入れている債券にかかる格付を加重平均したものであり、当ファンドにかかる格付ではありません。

国・地域別組入比率



※対組入債券評価額比

通貨別構成比率



※対純資産総額比

当月の市況動向

当月の米長期金利は前月から小幅に上昇しました。前半は、5月の米雇用統計で非農業部門雇用者数が市場予想を大幅に上回ったことや、原油価格が高水準で推移していたことから、金利は上昇基調で推移しました。その後、米国とイランの間で戦闘終結に向けた暫定合意が成立したことで中東情勢緊迫化への懸念が和らぎ、原油価格が下落したことから、金利も低下しました。後半は、米連邦公開市場委員会（FOMC）で政策金利の据え置きが決定されたものの、参加者による政策金利見通し（ドットチャート）において半数の参加者が年内の利上げを見込んでいたと示されたことから、短期ゾーンを中心に金利は上昇しました。その後は、原油価格の下落基調が継続したことでインフレ懸念が後退し、金利が低下する場面もあったものの、月末にかけては5月の米雇用動態調査（JOLTS）が市場予想を上回ったことなどを受けて、金利は再び上昇しました。当月末時点での米長期金利は4.47%となりました。

当月の欧州（独）長期金利は前月から低下しました。前半は、原油価格が高水準で推移していたことや、欧州各国で国債入札を控えていたことから、金利は上昇基調で推移しました。中旬に開催された欧州中央銀行（ECB）理事会では市場予想通り政策金利の0.25%の引き上げが決定され、インフレ見通しも上方修正されましたが、市場の反応は限定的でした。その後、米国とイランの間で戦闘終結に向けた暫定合意が成立したことで中東情勢緊迫化への懸念が和らぎ、原油価格が下落したことから、金利も低下に転じました。後半は、ECB高官から中立金利のレンジ上限の切り上げりや追加利上げを支持する発言が相次ぎましたが、原油価格の下落基調が継続したことでインフレ懸念が後退し、金利は低下基調で推移しました。当月末時点での欧州（独）長期金利は2.86%となりました。

新興国債券（ニッセイ新興国債券インデックス マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	2.9%	3.0%
3ヵ月	5.0%	5.1%
6ヵ月	5.3%	5.5%
1年	21.1%	21.4%
3年	32.4%	33.6%

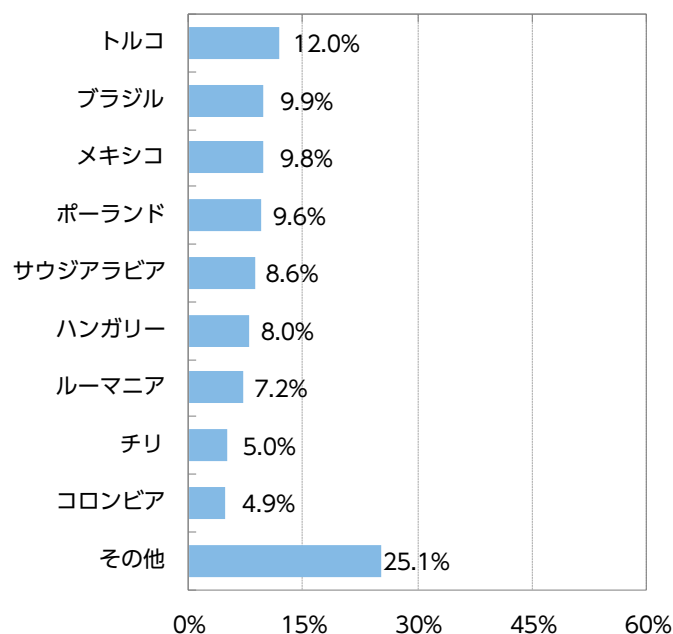
※上記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
 ※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
 ※ベンチマークはJ Pモルガン・エマージング・マーケット・ボンド・インデックス・プラス（除くB格以下）（円換算ベース）としています。

ポートフォリオ情報

平均格付	※1	B B B
平均修正デュレーション	※2	6.35年
平均最終利回り	※3	5.68%
平均クーポン	※4	5.88%
平均直利	※5	5.84%
銘柄数		134

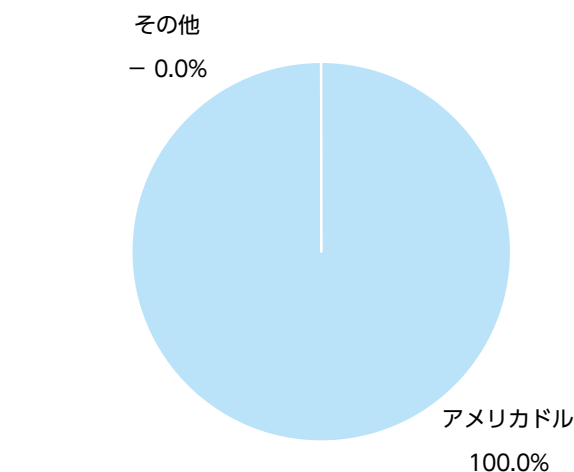
※1 格付は、ムーディーズ、S & Pのうち、上位の格付を採用しております。
 ※2 また平均格付とは、マザーファンドが組み入れている債券にかかる格付を加重平均したものであり、当ファンドにかかる格付ではありません。

国・地域別組入比率



※対組入債券評価額比

通貨別構成比率



※対純資産総額比

当月の市況動向

当月の米ドル建て新興国債券金利は横ばいとなりました。米国国債金利は前月末比で小幅な上昇となるも、新興国債券の米国国債に対するスプレッド（上乗せ金利）は前月末比でおおむね横ばいとなり、新興国債券金利は横ばいとなりました。

米国国債金利は、中東情勢の不透明感やそれに伴う原油価格動向等に左右され上下しましたが、結果として前月末比では小幅な上昇となりました。

新興国債券の米国国債に対するスプレッドは、月を通じておおむね横ばいで推移しました。

国内リート（ニッセイＪ－ＲＥＩＴインデックス マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	0.2%	0.2%
3ヵ月	－1.4%	－1.3%
6ヵ月	－8.3%	－8.2%
1年	6.4%	6.4%
3年	11.7%	11.6%

※左記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
 ※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
 ※ベンチマークは東証ＲＥＩＴ指数（配当込み）としています。

組入上位10銘柄

（銘柄数：58）

	銘柄	比率
1	日本ビルファンド投資法人	7.2%
2	ジャパンリアルエステイト投資法人	5.7%
3	日本都市ファンド投資法人	5.4%
4	野村不動産マスターファンド投資法人	4.5%
5	KDX不動産投資法人	4.3%
6	日本プロロジスリート投資法人	4.3%
7	G L P 投資法人	4.2%
8	オリックス不動産投資法人	3.6%
9	ユナイテッド・アーバン投資法人	3.6%
10	大和ハウスリート投資法人	3.5%

※対組入投資信託証券評価額比

当月の市況動向

当月におけるＪ－ＲＥＩＴ市場（東証ＲＥＩＴ指数配当込み）の騰落率は+0.16%となりました。当月末時点におけるＪ－ＲＥＩＴの予想配当金利回りは+5.05%（時価総額加重平均）、10年国債金利（長期金利）は+2.68%となり、イールドスプレッド（配当金利回りと10年国債金利の差）は約+2.37%です。

当月のＪ－ＲＥＩＴ市場は、上昇しました。当月は、国内長期金利の動向に敏感に反応する展開が続きました。前半は金利が上昇基調となったことで軟調に推移しましたが、月半ばから後半にかけて金利が落ち着き、低下に転じた局面では反発基調となり、底打ち感も見られる推移となりました。金利の高止まりに伴う要求利回りの上昇や、支払利息等の負債コスト増加リスクがＪ－ＲＥＩＴ市場の重荷として強く意識されたものの、好調な賃料増額により不動産ファンダメンタルズ（賃料や稼働率等、不動産市場の基礎的条件）の改善が継続していることが、金利が低下に転じた局面で反発した要因として挙げられます。当月におけるセクター別の動きとしては、ホテルセクターが相対的に堅調な推移となった一方、住宅・ヘルスケアセクターが相対的に弱い動きとなりました。

先進国リート（ニッセイ先進国リートインデックス マザーファンド）

騰落率

	ファンド	ベンチマーク
1ヵ月	5.1%	5.1%
3ヵ月	16.8%	16.8%
6ヵ月	19.1%	19.0%
1年	33.6%	33.3%
3年	56.9%	55.2%

※上記は過去の実績であり、将来の運用成果等を保証するものではありません。
※ファンド騰落率は実際の投資家利回りとは異なります。
※ベンチマークは、S & P先進国REITインデックス（除く日本、配当込み、円換算ベース）としています。

国・地域別組入比率

国・地域	比率
アメリカ	80.0%
オーストラリア	6.6%
イギリス	4.1%
シンガポール	3.0%
フランス	2.0%
カナダ	1.1%
ベルギー	1.0%
香港	0.8%
スペイン	0.6%
その他	0.7%

※対組入投資信託証券評価額比

組入上位10銘柄

	銘柄	国・地域	比率
1	WELLTOWER INC	アメリカ	9.2%
2	PROLOGIS INC	アメリカ	7.5%
3	EQUINIX INC	アメリカ	6.2%
4	SIMON PROPERTY GROUP INC	アメリカ	4.3%
5	DIGITAL REALTY TRUST INC	アメリカ	3.6%
6	REALTY INCOME CORP	アメリカ	3.4%
7	PUBLIC STORAGE	アメリカ	3.0%
8	GOODMAN GROUP	オーストラリア	2.6%
9	VENTAS INC	アメリカ	2.5%
10	IRON MOUNTAIN INC	アメリカ	2.2%

※対組入投資信託証券評価額比

当月の市況動向

当月の外国リート市場（米ドルベース）は上昇しました。

国別では、イギリスや米国が上昇した一方、シンガポールなどが下落しました。

セクター別では、ホテル・リゾートやヘルスケアが上昇した一方、データセンターや産業施設が下落しました。

為替は、米国の利上げ見通しの高まりや、政府・日銀による為替介入への警戒感の低下とみられる動きを受けて、米ドルに対して円安となりました。

ファンドの特色

①国内外の株式・債券・リート（不動産投資信託証券）に分散投資を行います。

【投資対象とするマザーファンド】

ニッセイ国内株式 インデックスマザーファンド	「ＴＯＰＩＸ（東証株価指数）（配当込み）」の動きに連動する投資成果をめざします。
ニッセイ外国株式 インデックスマザーファンド	「ＭＳＣＩコクサイ・インデックス（配当込み、円換算ベース）」の動きに連動する投資成果をめざします。
ニッセイ新興国株式 インデックスマザーファンド※	「ＭＳＣＩエマージング・マーケット・インデックス（配当込み、円換算ベース）」の動きに連動する投資成果をめざします。
ニッセイ国内債券 パッシブマザーファンド	「ＮＯＭＵＲＡ－ＢＰＩ総合」の動きに連動する投資成果をめざします。
ニッセイ外国債券 インデックスマザーファンド	「ＦＴＳＥ世界国債インデックス（除く日本、円換算ベース）」の動きに連動する投資成果をめざします。
ニッセイ新興国債券 インデックスマザーファンド	「ＪＰモルガン・エマージング・マーケット・ボンド・インデックス・プラス（除くＢ格以下）（円換算ベース）」の動きに連動する投資成果をめざします。
ニッセイＪ－ＲＥＩＴ インデックスマザーファンド	「東証ＲＥＩＴ指数（配当込み）」の動きに連動する投資成果をめざします。
ニッセイ先進国リート インデックスマザーファンド	「Ｓ＆Ｐ先進国ＲＥＩＴインデックス（除く日本、配当込み、円換算ベース）」の動きに連動する投資成果をめざします。

※投資対象には、ＤＲ（預託証券）もしくは株式等と同等の投資効果が得られる証券および証書等を含みます。ＤＲ（預託証券）とは、Depositary Receiptの略で、ある国の企業の株式を海外で流通させるために、その会社の株式を銀行などに預託し海外で発行される証券をいい、株式と同様に金融商品取引所などで取引されます。

②８つの資産への投資割合は均等を基本とします。

※各投資対象資産の指数を８分の１ずつ組合せた合成ベンチマークの動きに連動する投資成果をめざします。

③購入時および換金時の手数料は無料です。

〈各指数について〉

●ＴＯＰＩＸ（東証株価指数）

ＴＯＰＩＸ（東証株価指数）とは、日本の株式市場を広範に網羅するとともに、投資対象としての機能性を有するマーケット・ベンチマークで、浮動株ベースの時価総額加重方式により株式会社ＪＰＸ総研が算出する株価指数です。

ＴＯＰＩＸ（東証株価指数）の指数値および同指数にかかる標章または商標は、株式会社ＪＰＸ総研または株式会社ＪＰＸ総研の関連会社（以下「ＪＰＸ」といいます）の知的財産であり、指数の算出、指数値の公表、利用など同指数に関するすべての権利・ノウハウおよび同指数にかかる標章または商標に関するすべての権利はＪＰＸが有します。ＪＰＸは、同指数の指数値の算出または公表の誤謬、遅延または中断に対し、責任を負いません。当ファンドは、ＪＰＸにより提供、保証または販売されるものではなく、当ファンドの設定、販売および販売促進活動に起因するいかなる損害に対してもＪＰＸは責任を負いません。

●MSCIコクサイ・インデックス（配当込み、円換算ベース）

MSCIコクサイ・インデックス（配当込み）はMSCI Inc.が公表している指数であり、日本を除く主要先進国の株式により構成されています。同指数に関する著作権、知的財産権、その他一切の権利はMSCI Inc.に帰属します。また、MSCI Inc.は同指数の内容を変更する権利および公表を停止する権利を有しています。なお、「円換算ベース」とは同指数をもとに、委託会社が独自に円換算したものです。

●MSCIエマージング・マーケット・インデックス（配当込み、円換算ベース）

MSCIエマージング・マーケット・インデックス（配当込み）はMSCI Inc.が公表している指数であり、世界の新興国の株式により構成されています。同指数に関する著作権、知的財産権、その他一切の権利はMSCI Inc.に帰属します。また、MSCI Inc.は同指数の内容を変更する権利および公表を停止する権利を有しています。なお、「円換算ベース」とは同指数をもとに、委託会社が独自に円換算したものです。

●NOMURA-BPI総合

日本国内で発行される公募債券流通市場全体の動向を的確に表すために、野村フィデューシャリー・リサーチ&コンサルティング株式会社によって計算、公表されている投資収益指数であり、その知的財産は同社に帰属します。なお、同社は、当ファンドの運用成果等に関し、一切の責任を負うものではありません。

●FTSE世界国債インデックス（除く日本、円換算ベース）

FTSE世界国債インデックス（除く日本）は、FTSE Fixed Income LLCにより運営され、日本を除く世界主要国の国債の総合収益率を各市場の時価総額で加重平均した債券インデックスです。このインデックスのデータは、情報提供のみを目的としており、FTSE Fixed Income LLCは、当該データの正確性および完全性を保証せず、またデータの誤謬、脱漏または遅延につき何ら責任を負いません。このインデックスに対する著作権等の知的財産その他一切の権利はFTSE Fixed Income LLCに帰属します。なお、「円換算ベース」とは同インデックスをもとに、委託会社が独自に円換算したものです。

●JPMorgan・エマージング・マーケット・ボンド・インデックス・プラス（除くB格以下）（円換算ベース）

JPMorgan・エマージング・マーケット・ボンド・インデックス・プラス（除くB格以下）はJPMorgan・エマージング・マーケット・ボンド・インデックス・プラス（以下「EMB I+」といいます）から格付がB格以下の債券等を除いたものです。

EMB I+は時価総額加重型の米ドル建て新興国債券インデックスであり、インデックスが対象とする新興国によって発行された確定・変動利付債券等やローンを対象としています。

JPMorgan・エマージング・マーケット・ボンド・インデックス・プラス（除くB格以下）の情報は信頼性が高いとみなす情報源から得られたものですが、J.P.モルガンはその完全性または正確性を保証するものではありません。ニッセイアセットマネジメント株式会社は、同インデックスの使用許諾を得て使用しています。J.P.モルガンからの書面による事前の承諾なく同インデックスを複製、使用、頒布することは禁じられています。Copyright ©2016 J.P. Morgan Chase & Co. 無断複製・転載を禁じます。

なお、「円換算ベース」とは同インデックスをもとに、委託会社が独自に円換算したものです。

●東証REIT指数

東証REIT指数とは、東証市場に上場する不動産投資信託（Real Estate Investment Trust）全銘柄を対象とした浮動株ベースの時価総額加重方式により株式会社JPX総研が算出する株価指数です。

東証REIT指数の指数値および同指数にかかる標章または商標は、株式会社JPX総研または株式会社JPX総研の関連会社（以下「JPX」といいます）の知的財産であり、指数の算出、指数値の公表、利用など同指数に関するすべての権利・ノウハウおよび同指数にかかる標章または商標に関するすべての権利はJPXが有します。JPXは、同指数の指数値の算出または公表の誤謬、遅延または中断に対し、責任を負いません。当ファンドは、JPXにより提供、保証または販売されるものではなく、当ファンドの設定、販売および販売促進活動に起因するいかなる損害に対してもJPXは責任を負いません。

●S&P先進国REITインデックス（除く日本、配当込み、円換算ベース）

S&P先進国REITインデックス（除く日本、配当込み）（「当インデックス」）はS&P Dow Jones Indices LLC（「SPDJII」）の商品であり、これを利用するライセンスがニッセイアセットマネジメント株式会社に付与されています。Standard & Poor's®およびS&P®はStandard & Poor's Financial Services LLC（「S&P」）の登録商標で、Dow Jones®はDow Jones Trademark Holdings LLC（「Dow Jones」）の登録商標であり、これらの商標を利用するライセンスがSPDJIIに、特定目的での利用を許諾するサブライセンスがニッセイアセットマネジメント株式会社にそれぞれ付与されています。当ファンドは、SPDJII、Dow Jones、S&Pまたはそれぞれの関連会社によってスポンサー、保証、販売、または販売促進されているものではなく、これら関係者のいずれも、かかる商品への投資の妥当性に関するいかなる表明も行わず、当インデックスの誤り、欠落、または中断に対して一切の責任も負いません。なお、「円換算ベース」とは同指数をもとに、委託会社が独自に円換算したものです。

投資リスク

※ご購入に際しては、投資信託説明書（交付目論見書）の内容を十分にお読みください。

基準価額の変動要因

- ファンド（マザーファンドを含みます）は、値動きのある有価証券等（外貨建資産には為替変動リスクもあります）に投資しますので、基準価額は変動します。また、ベンチマークの動きに連動することを目標に運用しますので、ベンチマークの動きにより基準価額は変動します。したがって、投資元本を割込むことがあります。
- ファンドは、預貯金とは異なり、投資元本および利回りの保証はありません。運用成果（損益）はすべて投資者の皆様のものとなりますので、ファンドのリスクを十分にご認識ください。

主な変動要因

株式投資リスク		株式は国内および国際的な景気、経済、社会情勢の変化等の影響を受け、また業績悪化（倒産に至る場合も含む）等により、価格が下落することがあります。
債券投資リスク	金利変動リスク	金利は、景気や経済の状況等の影響を受け変動し、それにともない債券価格も変動します。一般に金利が上昇した場合には、債券の価格が下落します。
	信用リスク	債券の発行体が財政難・経営不振、資金繰り悪化等に陥り、債券の利息や償還金をあらかじめ定められた条件で支払うことができなくなる場合（債務不履行）、またはそれが予想される場合、債券の価格が下落することがあります。
不動産投資信託（リート）投資リスク	保有不動産に関するリスク	リーートの価格は、リートが保有する不動産の価値および賃貸料収入の増減等、また不動産市況や景気動向等の影響を受け変動します。 リートが保有する不動産の賃貸料や稼働率の低下、また自然災害等によって保有する不動産に損害等が生じた場合、リーートの価格が下落することがあります。
	金利変動リスク	リートは、金利が上昇する場合、他の債券の利回り等との比較から売却され、価格が下落することがあります。 また、金融機関等から借入れを行うリートは、金利上昇時には金利負担の増加により収益性が悪化し、リーートの価格が下落することがあります。
	信用リスク	リートは一般の法人と同様に倒産のリスクがあり、リーートの経営や財務状況が悪化した場合、リーートの価格が下落することがあります。
	J-REITの税制に関するリスク	一般に、J-REITの発行者には課税の実質免除措置が適用されますが、税法上の一定の要件を満たさない場合、当該措置は適用されず発行者の税負担が増大し、J-REITの価格が下落することおよび分配金が減少することがあります。
	リートおよび不動産等の法制度に関するリスク	リートおよび不動産等に関する法制度（税制・建築規制等）の変更により不動産の価値および収益性が低下する場合、リーートの価格が下落することおよび分配金が減少することがあります。
為替変動リスク		原則として対円での為替ヘッジを行わないため、外貨建資産については、為替変動の影響を直接的に受けます。一般に円高局面ではファンドの資産価値が減少します。
カントリーリスク		外国の資産に投資するため、各国の政治・経済情勢、外国為替規制、資本規制等による影響を受け、ファンドの資産価値が減少する可能性があります。特に、新興国の経済状況は先進国経済と比較して一般的に脆弱である可能性があり、ファンドの資産価値が大きく減少したり、運用方針にそった運用が困難になる可能性があります。
流動性リスク		市場規模が小さいまたは取引量が少ない場合、市場実勢から予期される時期または価格で取引が行えず、損失を被る可能性があります。

! 基準価額の変動要因は、上記に限定されるものではありません。

その他の留意点

- 新興国の株式および債券投資に関しては、以下の事項が顕在化する可能性が高いことにご留意ください。
金融商品取引所の取引の停止（個別銘柄の売買停止等を含みます）、外国為替取引の停止、その他やむを得ない事情（投資対象国・地域における非常事態の発生※による市場の閉鎖、流動性の著しい低下あるいは資金の受渡しに関する障害等）があるときには、ファンドの購入・換金の申込みの受付けを中止すること、および既に受付けた購入・換金の申込みの受付けを取消すことがあります。

※金融危機、デフォルト、重大な政策変更や資産凍結を含む規制の導入、クーデターや重大な政治体制の変更等。

- ストックコネクト※を通じた取引に関しては、以下の事項にご留意ください。
ファンドは中国Ａ株への投資に際し、ストックコネクト（上海・香港相互株式取引制度および深セン・香港相互株式取引制度）を通じて行う場合があります。ストックコネクトを通じた投資は、取引や決済に関する特有の制限等で意図した取引等ができない場合、取引等に特有の費用が課される場合、ストックコネクトにおける取引停止や中国本土市場と香港市場の休業日の違いにより、中国本土市場の急変あるいは株価の大幅な変動時に対応できない場合等には、ファンドの基準価額とベンチマークとの動きが一致しない要因となることがあります。なお、ストックコネクトでは、大きな制度変更が行われる可能性があります。

※ストックコネクトとは、ファンドを含む外国の投資家が、上海証券取引所および深セン証券取引所の中国Ａ株を香港の証券会社を通じて売買することができる制度です。なお、中国Ａ株とは、主な投資家として中国居住者を想定しているものですが、一定の条件のもとでファンドを含む外国の投資家にも投資が認められています。

分配金に関する留意事項

- 分配金は、預貯金の利息とは異なり、ファンドの信託財産から支払われますので、分配金が支払われると、その金額相当分、基準価額は下がります。
- 分配金は、計算期間中に発生した収益（経費控除後の配当等収益および評価益を含む売買益）を超えて支払われる場合があります。その場合、当期決算日の基準価額は前期決算日と比べて下落することになります。また、分配金の水準は、必ずしも計算期間におけるファンドの収益率を示すものではありません。
- 受益者のファンドの購入価額によっては、支払われる分配金の一部または全部が実質的に元本の一部払戻しに相当する場合があります。ファンド購入後の運用状況により、分配金額より基準価額の値上がり小さかった場合も同様です。

- ファンドは、多量の換金の申込みが発生し換金代金を短期間で手当てする必要がある場合や組入資産の主たる取引市場において市場環境が急変した場合等には、一時的に組入資産の流動性が低下し、市場実勢から期待できる価格で取引ができないリスク、取引量が限定されるリスク等が顕在します。
これらにより、基準価額にマイナスの影響を及ぼす可能性、換金の申込みの受付けを中止する、また既に受付けた換金の申込みの受付けを取消しする可能性、換金代金のお支払いが遅延する可能性などがあります。

手 続 ・ 手 数 料 等

※基準価額は便宜上1万口当りに換算した価額で表示されます。

お申込みメモ

購入時	購入単位	販売会社が定める単位とします。
	購入価額	購入申込受付日の翌営業日の基準価額とします。
換金時	換金価額	換金申込受付日の翌営業日の基準価額とします。
	換金代金	換金申込受付日から起算して、原則として8営業日目からお支払いします。
申込について	申込締切時間	原則として毎営業日の午後3時30分までに販売会社の手続きが完了したものを当日受付分とします。ただし、申込締切時間は販売会社によって異なる場合がありますので、詳しくは販売会社にご確認ください。
	申込不可日	次のいずれかの休業日と同日の場合は、購入・換金の申込みの受け付けを行いません。 ・ニューヨーク証券取引所、ニューヨークの銀行、ロンドンの銀行、香港取引決済所、香港の銀行 海外休日カレンダー： https://www.nam.co.jp/fundinfo/calendar/holiday.html#hdg30
決算・分配	決算日	11月20日（該当日が休業日の場合は翌営業日）
	収益分配	年1回の毎決算日に、収益分配方針に基づき収益分配を行います。
その他	信託期間	無期限（設定日：2018年2月13日）
	繰上償還	委託会社はあらかじめ受益者に書面により通知する等の手続きを経て、ファンドを繰上償還させることがあります。
	課税関係	課税上は株式投資信託として取扱われます。 配当控除、益金不算入制度の適用はありません。 公募株式投資信託は税法上、一定の要件を満たした場合にNISA（少額投資非課税制度）の対象となり、当ファンドは、NISAの「成長投資枠（特定非課税管理勘定）」の対象となります。ただし、販売会社により取扱いが異なる場合があります。 詳しくは、販売会社にお問合せください。

 ご購入に際しては、投資信託説明書（交付目論見書）の内容を十分にお読みください。

ファンドの費用

投資者が直接的に負担する費用		
購入時	購入時手数料	ありません。
換金時	換金時手数料	ありません。
	信託財産留保額	ありません。
投資者が信託財産で間接的に負担する費用		
毎 日	運用管理費用 (信 託 報 酬)	ファンドの純資産総額に 年率0.1749%（税抜0.159%） 以内の率をかけた額とし、ファンドからご負担いただきます。 ※ファンドが投資対象とするリートは、市場の需給により価格形成されるため、リートの費用は表示しておりません。
	監 査 費 用	ファンドの純資産総額に年率0.0011%（税抜0.001%）をかけた額とし、ファンドからご負担いただきます。
随 時	その他の費用・ 手数料	組入有望証券の売買委託手数料、信託事務の諸費用および借入金の利息等はファンドからご負担いただきます。これらの費用は運用状況等により変動するため、事前に料率・上限額等を記載することはできません。

-  当該費用の合計額、その上限額および計算方法は、運用状況および受益者の保有期間等により異なるため、事前に記載することはできません。
-  詳しくは、投資信託説明書（交付目論見書）をご覧ください。

税金

分配時の普通分配金、換金（解約）時および償還時の差益（譲渡益）に対して、所得税および地方税がかかります。詳しくは、投資信託説明書（交付目論見書）をご覧ください。

- ・少額投資非課税制度「愛称：NISA（ニーサ）」は少額上場株式等に関する非課税制度であり、NISAをご利用の場合、一定の額を上限として、毎年、一定額の範囲で新たに購入した公募株式投資信託などから生じる配当所得および譲渡所得が無期限で非課税となります。ご利用になれるのは、販売会社で非課税口座を開設し、税法上の要件を満たしたファンドを購入するなど、一定の条件に該当する方となります。詳しくは、販売会社にお問合せください。
- ・外国税額控除の適用となった場合には、分配時の税金が投資信託説明書（交付目論見書）の記載と異なる場合があります。
- ・法人の場合は上記とは異なります。
- ・確定拠出年金法に基づく運用として購入する加入者については、確定拠出年金の積立金の運用にかかる税制が適用され、またNISAおよび外国税額控除の適用対象外です。
- ・税金の取扱いの詳細につきましては、税務専門家等にご確認されることをお勧めします。

委託会社【ファンドの運用の指図を行います】	ファンドに関するお問合せ先
ニッセイアセットマネジメント株式会社 金融商品取引業者登録番号 関東財務局長（金商）第369号 加入協会：一般社団法人資産運用業協会	ニッセイアセットマネジメント株式会社 コールセンター 0120-762-506 9:00～17:00（土日祝日・年末年始を除く） ホームページ https://www.nam.co.jp/
受託会社【ファンドの財産の保管および管理を行います】	
三菱UFJ信託銀行株式会社	

ご留意いただきたい事項

- ①投資信託はリスクを含む商品であり、運用実績は市場環境等により変動し、運用成果（損益）はすべて投資者の皆様のものとなります。投資元本および利回りが保証された商品ではありません。
- ②当資料はニッセイアセットマネジメントが作成したものです。ご購入に際しては、販売会社よりお渡しする投資信託説明書（交付目論見書）、契約締結前交付書面等（目論見書補完書面を含む）の内容を十分にお読みになり、ご自身でご判断ください。
- ③投資信託は、預金保険機構および保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。また、登録金融機関で購入された場合、投資者保護基金による支払いの対象にはなりません。
- ④投資信託のお取引に関しては、クーリング・オフ（金融商品取引法第37条の6の規定）の適用はありません。
- ⑤当資料のいかなる内容も将来の運用成果等を示唆あるいは保証するものではありません。また、資金動向、市況動向等によっては方針通りの運用ができない場合があります。
- ⑥当資料は、信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。
- ⑦当資料のグラフ・数値等はあくまでも過去の実績であり、将来の投資収益を示唆あるいは保証するものではありません。また税金・手数料等を考慮しておりませんので、実質的な投資成果を示すものではありません。
- ⑧当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。
- ⑨当資料の内容は原則作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。

取扱販売会社一覧

※販売会社は今後変更となる場合があります。また、販売会社によっては、新規のお申込みを停止している場合もあります。

詳しくは、販売会社または委託会社の照会先までお問合せください。

取扱販売会社名	金融商品取引業者	登録金融機関	登録番号	日本証券業協会	一般社団法人金融先物取引業協会	一般社団法人第二種金融商品取引業協会	取扱販売会社名	金融商品取引業者	登録金融機関	登録番号	日本証券業協会	一般社団法人金融先物取引業協会	一般社団法人第二種金融商品取引業協会
あかつき証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第67号	○	○		株式会社ＳＢＩ新生銀行（委託金融商品取引業者 株式会社ＳＢＩ証券）	○		関東財務局長(登金)第10号	○	○	
岩井コスモ証券株式会社	○		近畿財務局長(金商)第15号	○	○	○	株式会社ＳＢＩ新生銀行（委託金融商品取引業者 マネックス証券株式会社）	○		関東財務局長(登金)第10号	○	○	
株式会社ＳＢＩ証券	○		関東財務局長(金商)第44号	○	○	○	PayPay銀行株式会社	○		関東財務局長(登金)第624号	○	○	
岡三証券株式会社(※1)	○		関東財務局長(金商)第53号	○	○	○	株式会社三菱ＵＦＪ銀行(※1)	○		関東財務局長(登金)第5号	○	○	○
Ｊトラストグローバル証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第35号	○	○		ニッセイアセットマネジメント株式会社	○		関東財務局長(金商)第369号		○	
ニュース証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第138号	○	○		(※1)インターネットのみのお取扱いとなります。						
松井証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第164号	○		○							
マネックス証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第165号	○	○	○							
三菱ＵＦＪｅスマート証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第61号	○	○	○							
moomo証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第3335号	○	○								
楽天証券株式会社	○		関東財務局長(金商)第195号	○	○	○							
株式会社イオン銀行（委託金融商品取引業者 マネックス証券株式会社）	○		関東財務局長(登金)第633号	○									